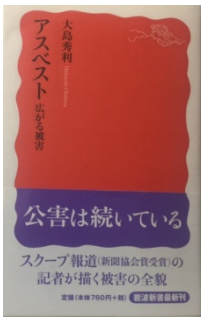
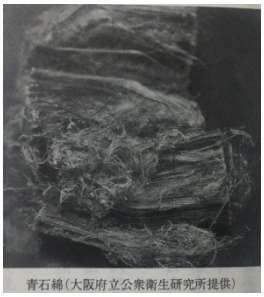
アスベスト 広がる被害



写真は2011年7月刊行の岩波新書。著者は毎日新聞の大島秀利記者。表紙帯には、スクープ報道(新聞協会賞受賞)の記者が描く被害の全貌とある。表紙カバー裏から―高い断熱性や耐久性から、かつては〝奇跡の鉱物〟といわれたアスベスト。しかし今、その微細な繊維を吸い込んだことによる健康被害が広がっている。建築物など身近に潜む危険から、被害者の声、取るべき対策まで、アスベスト報道で新聞協会賞を受賞した記者が、取材の経緯も交えながら、その全貌を明らかにする。

筆者は「クボタショック」の前後あわせて 10 年あまり、取材テーマの大きな柱として、アスベストについて追ってきた。本書を書いた目的の一つは、アスベストによる深刻な被害は過去のものではなく、現在進行形でこの国に現れていて、このままの状態を放置すると、さらに拡大するおそれがあることを広く知ってもらうためである。多くの識者が「このままでは、大事なことが理解されずに、またクボタショック以前に戻ってしまう」とアスベスト問題の風化を懸念している。問題は表に出始めたばかりなのに、である。


青石綿(大阪府立公衆衛生研究所提供)

目次は、第１章 アスベストとは、第２章 公害の〝発見〟と、その衝撃、第３章 政府の情報隠し、第４章 広がるアスベスト禍、第５章 生活の中の危険 ―アスベスト被害〝第二波〟の脅威、第６章 世界のアスベスト問題、終章 これからどう向き合うべきか。じつに多くのことを学んだ。紹介したいことは多いが、ここでは二点だけ。

一つは、10 年ほど前にテレビで見たことに関わる。JR 尼崎駅近くの団地まで行き、クボタショックの衝撃を実感した。武澤一子さんは二男の真治さん(当時 48 歳)が中学生のころ、クボタ旧神崎工場の東隣の団地に引っ越してきた。きれい好きでよく掃除をしたが、工場方面からしきりとほこりが飛んできて、洗濯物やテーブルがものすごく汚れた。約 35 年後の 2004 年、真治さんは突然、胸の痛みを訴えた。胸膜中皮腫と診断されて 2005 年 5 月に兵庫医科大学病院に入院したが、「すでに手遅れの状態」と家族は宣告された。

「クボタショック」のきっかけとなった 2005 年 6 月 29 日付の毎日新聞夕刊(大阪本社版)

症状が悪化するにしたがって、骨と皮だけになり、寝ていると床ずれで、「痛い、痛い」とうめいた。「かあちゃん、あるだけのふとんを下に敷いてくれないか」と苦しそうにしきりと頼んだ。心臓の病を抱えていた一子さんは、身をすり減らしながら看病に

あたった。真治さん酸素吸入をしながら、「悔しい、無念や」という言葉を残して、05年9月に亡くなった。一子さんが息子と暮らした団地のベランダからは、旧神崎工場の敷地が見える。

もう一つは、わたしの親父に関わることだ。旧国鉄（日本国有鉄道）のアスベスト関連職場で働いた人は約10万人にのぼる。遅くとも昭和初期には蒸気機関車にアスベストが使われていたといわれており、ディーゼル機関、客車や電車にも床、壁、天井、ブレーキ、電気系統のさまざまな部分に利用されていた。

車両の製造過程やメンテナンス、検査の現場では、アスベスト粉塵が特に飛散しやすい状況だった。被害は埋もれていたが、兵庫県の立谷勇さんが、中皮腫の発症は国鉄の仕事と関係あると気づいたことをきっかけに被害を訴える人が次々と出てきた。

わたしの親父は20数年前、肺がんで亡くなった。家族に「宣告」され3ヶ月だった。肺がんで苦しむ姿は今でも忘れられない。親父は「国鉄マン」として働いた。若い頃は機関車関係にも従事していた。亡くなった頃には考えもしなかったが、本書を読んで、ひょっとしたらアスベストが影響しているのではないかと。アスベストを吸ってから、おおむね20-60年の時間を経てから発症するという潜伏期間の長さを考えると。……

（2017年11月9日）